

第6回 有限会社田原板金製作所様



田原茂社長（左）と田原則彦専務（右）



有限会社田原板金（京都市下京区）

どこか懐かしい風情の残る京町家を拠点に、関西におけるチタン屋根施工のパイオニアとして、多数の実績を誇る有限会社田原板金製作所様。長年来、神社仏閣での銅板のお仕事で厚い信頼を築いてこられました。チタンにおいても、神社仏閣の「伝統のかたち」をチタンで再現するという、高い技術と根気が要求される分野で、素晴らしいお仕事を残されています。現在の京都は、日本文化の都であるとともにハイテク産業都市としても知られていますが、伝統のかたちをチタンで、という田原板金様は、そんな京都の街を象徴しているかのよう。なお、田原茂社長は、京都府板金工業組合理事長として業界の要職を担われる一方、京の夏の風物詩・祇園祭でもご活躍。菊水鉾の音頭取りとして、恒例の山鉾巡行でも見事な采配をふるわれています。

チタンの第一印象は、軽くて運搬性が良い

田原板金さんは、もうかなりの件数のチタン屋根を施工されていますが、最初に手がけられたのは小倉百人一首殿堂ですね。

田原 ええ、そうです。あれは、金閣寺の茶室の屋根を施工された京都建築株式会社の桶本さんが話をもってきてくださいました。

最初の物件で、いきなりあの規模のものを施工されたのですね。

田原 面積が400平米ほどもあり、部材点数も何百枚になりました。常時4人で施工して、材料を運ぶときなどは、さらに1人増やしました。

初めてチタンを扱われた印象は。

田原 とにかく軽い。だから運搬しやすい。とくに屋根に上げることを考えたら、非常に楽だと思いました。重量的に言えば、銅の半分以下です。2メートル物に加工したものを運んだのですが、チタンだから20本は運べる。銅板だったらせいぜい10本くらいしか運べません。それに、スプリングバックが強いから、もし誰かが施工した上に乗ったとしても形が崩れにくい。銅板だと重みで変形する心配もあります。デメリットは加工性ですね。まだ軟質材が開発される前というのもありましたが、ハゼを曲げてでも起き上がる。だからそれを機械で押さえ込んで、寝かせておく。それを現場で貼っていきました。

チタンはハサミに負担がかかりますね。

田原 チタンを切っているときはわからないのですが、その後、銅板を切ろうとすると、スパッと切れない。それで気が付くという感じです。

すると、チタンをするのも考えものだと。

田原 そんなことはないですよ。軽いから楽ですし、仕上がり喜んでいただけたら、苦勞のしがいがあります。

そうおっしゃっていただけると嬉しいですね。施工性という部分では、いろいろな意見がありますので。小倉百人一首殿堂の次は。

田原 妙泉寺さんと春日神社さんを、ほぼ同時期にやりました。どちらも京都の物件です。

春日神社さんの唐破風を拝見したときに、よくここまでのお仕事をされたものと驚きました。

田原 あのとときは、チタンはなかなか反らないからと思い、アールのところをほんの気持ちだけ多めに叩いた。だから後で微妙に絞り直しています。軒付けにしても、正面の5段に貼っている部分は屋根より作業が難しい。細い上に、ハゼをかけていかななくてはなりません。それが非常にきれいにしえたのは、叩くのと絞り込みの両方の技術を駆使したからです。手間はかかりましたが、うちがチタンを勧めたものだから利益は気にしませんでした。桶本さんを通してですが、小倉百人一首殿堂の仕事でチタンを経験できた恩返しのためにも勧めました。

春日神社さんの場合は、非常に手間のかかる唐破風



小倉百人一首殿堂

をチタンで施工されました。銅でされるのと比べたら、手間はどれくらい違うのでしょうか。

田原 唐破風は作業が細かくなりますので、時間的には、銅でする3倍くらいだったでしょうか。ところが、うちは銅板の感覚で請け負ったんです。唐破風なんてやり慣れていますから、材料が変わるだけだ。銅がステンレスになり、そのステンレスがチタンになるだけだ、と思っていました。だけど1回、2回叩いただけでは寝ない。チタンでも唐破風なしの軒付けだったら本当に楽ですよ。機械で加工して、ポンポン叩けばいいだけですから。

小倉百人一首殿堂にしても、部材を真っ直ぐに使う部分が多い。だからせいぜい葺き足が違ったり、仕舞いの部分、ハマグリだけがアールになっているくらいだから、同じもので数をこしらえればいい。その都度型を取って、1段ずつ違うものをやる必要はないから、人数でやってしまえば問題はない。だから最初は、銅板の倍もかからないだろうと思っていました。

形状によっても、手間がかなり違うのですね。

田原 全然違います。だからお宮さんやお寺さんの場合は、安くできないかと言われても、複雑な形を求められれば限界がある。ただ春日神社さんの場合は、昔から仕事以外の付き合いもあるし、他の銅板の屋根もずっと施工させてもらっていました。それに当時、京都では北野

天満宮くらいしかチタンの物件はなかった。だからチタンを勧めたら絶対に喜ばれるだろうと思いました。すると案の定、宮司さんが非常に興味を示されました。唐破風の反対側には千鳥の破風がありまして、箕甲ですが、それも先日、チタンで施工させていただきました。

妙泉寺さんについては。

田原 妙泉寺さんは屋根は寄棟で、勾配のきつい一文字葺きです。唐破風があって、鬼もチタンでこしらえました。今でこそ溶接の立派なチタンの鬼がありますが、これは経の巻の鬼です。全国技能士会連合会の「匠の技ネット」(<http://www.takuminowaza.net/791122260003>)でも紹介されています。ここも銅板にするという話がありましたが、うちがチタンを勧めました。なぜ勧めたかと言いますと、佐川さんや小倉百人一首殿堂のときに、途中で材料が足りなかったら困るからということで、多い目に仕入れていて、その残りが残りました。それに日本鐵板さんはチタンを在庫していて小ロットのオーダーにも対応されますので、もしそれで足りなくても、追い足しができるという安心感があったからです。

そのころ、もう1箇所チタンの物件を施工しています。京都でも郊外の方で、淀競馬場の近くにある網敷天満宮。屋根は瓦で、唐破風だけをチタンで葺きました。春日神社さんの小振りなものという感じです。



春日神社



妙泉寺



佐川美術館茶室

名作・佐川美術館の茶室は、1枚1枚葺き足が違う

次が佐川美術館の茶室ですね。屋根の独特のラインが美しいということで、とても評判になりました。

田原 小倉百人一首殿堂は上半分が瓦葺きで、真ん中から軒先までがチタン、佐川さんの場合は全面がチタンですが、どちらもよく似た造りです。軒先がきつい勾配のアールになっていて、あとは平を組み込んでいく。どちらも竹中工務店さんの設計です。

この佐川美術館の茶室では、設計の主任の方が、事前に軒先の模型を作って、イメージを確認したいとおっしゃいました。それで、葺き足を1寸から3寸くらいまで、2分か3分単位で少しずつ変えたものを2、3枚ずつ作って持って行き、それをベニヤで実物と同じようにこしらえたアールの上にはめ込んでいって、「この部分はこれがいい、だけどここはもう少し幅を広くしよう」とか言って合わせていきました。さすがにその葺き足の見本はチタンではなく、カラー鋼板で作りましたが、そのために何回も走りました。そうやって念入りに打ち合わせをした結果、きれいな葺き足のラインが出せました。

すると、葺き足は1枚1枚違うのですか。

田原 もちろん違います。軒先の部分は1枚1枚変えてあります。それに隅も角ハゼはダメなわけです。角では継げないので、1枚もので取らなくてはならない。ここもハマグリ、この角度もハマグリ、全部ハマグリ。それも、全部同じ寸法のハマグリでは味気がない。1段1段、隅の近くまでハゼを合わせて、角度も全部合わせていく。屋根がむくっていますので、全部勾配が違いますし、合わせる場所によって形も違います。本当に手間がかかりましたが、それが本来のわれわれの仕事です。角で継いだり、同じものをポン、ポン、ポンではダメなんです。

それに、足跡を残せないから、屋根の上から逆さまに葺いていかなくてはなりません。そのかわり一切上に乗っていないから仕上がりは実にきれいです。

もし足跡がついても、雨が降れば消えませんか。

田原 確かにそうなのですが、うちは主にお寺さん、お宮さんが施主ですから、感覚が違うんです。養生して養生して葺いていきます。小倉百人一首殿堂でも、私たち

は足跡をつけないように葺いたのだけど、コーキング屋さんか足をかけていったので足跡が残った。それには現場監督の方も厳しく注意していました。

チタンの場合、施工以外にも神経を使うのですね。

田原 銅板だったら色が変わっていきますから、乗って少々足跡がついてもわからなくなります。ところがチタンはまったく色が変わりませんし、後から化粧直しをしても追いつかないという印象があります。それに、高価なものですから、丁寧に扱わないとお施主さんに対しても申し訳が立たない。他の材料以上に気を遣いますが、その分、でき上がりはきれいですね。また、われわれ自身気を付けないといけないのは、触ったときに切れやすい。気を付けないとケガをする。プラストは表面がザラついているから、手袋もすぐにすり切れる。それと、鉄の道具でポンポンと叩くと、錆が付いたように見えたので驚きました。どうしてなのかと思ったら、道具の錆が付着したんです。だから、気になるときはゴムやステンレスの板をあてて叩くようにしています。

こういう場合は薄めた酸の液で拭けば、チタンは何ら変質せず、付いた錆だけきれいに除去できます。それにチタンの場合、鉄の錆が付着してもステンレスのようなもらい錆はできませんから、ご安心ください。汚れても、指紋が付いても、靴で乗って足跡が付いても、すぐであれば水で洗えばきれいになります。ところで、施主さんのご満足度はどうですか。

田原 やはり、それは喜ばれていますよ。耐用年数がまずいちばんの理由です。プラストの場合は「思っていた以上に仕上がりが落ち着いている」とおっしゃいますね。

誰でもできる仕事から、銅板のエキスパートへ

田原板金さんはチタン施工の先駆者というだけでなく、京都府板金工業組合の理事長としてもご活躍です。かなりの老舗だと理解していいのでしょうか。

田原 そういふことではありませんが、一応2代目です。父が創業したのですが、早く亡くなってしまいました。ただ、職人さんがいてくれましたので、その後は、母が看板を守り、組合にも母が継続して加入していました。

しかしその間、私や弟（則彦専務）は、別の板金屋で修業していました。普段は勤め先の仕事をして、日曜祭日は家の仕事をする。それで私たちが一人前になったころ、職人も高齢になり引退の時期になっていました。

これまでずっと社寺の銅板葺きでいいお仕事をされていますが、修業時代からこの道一筋ですか。

田原 いえ、その時代は、何でもしないとダメだと思っていましたし、万博景気で仕事がいくらでもありましたから、あらゆるものをやりました。屋根だけでなくダクトの仕事もありましたし、建売住宅もやりました。当時、お金に走る親方は建売をやっていました。

建売は利益が上がるのですか。

田原 その時代はよかったみたいですね。連棟ですから効率もいい。仮に1戸の手間が3万円として、それが2軒、3軒並んでいたら、1日に100メートルとかというロットで仕事がこなせるわけです。手間賃なんて1日1000円、2000円の時代です。それで1棟分やったら3万円。われわれ職人は別として、親方にしてみれば、すごい儲けになったわけです。

一般住宅ですと、トタンやブリキですか。

田原 そうです。だけど、そういう仕事は誰でもできる。そういうときに、銅板専門で文化財をやっている板金屋さんから、仕事の応援に来てほしいと言われました。私たちは当時、銅板というが高価なものだと思っていましたが、その業者は銅の鬼を叩いたりしている。それを見せてくださいと言って、現場にも連れていってもらって、「ああ、これはいい仕事だなあ」と思ったわけです。

それ以後、銅板の仕事に関わるようになったのですが、あるときコンクールに出場したら、青年部で入賞しました。まだ20代のころです。それで、親はいないけど仕事ができるのだなあ、と、ある程度は認めてもらえるようになりました。京都建装の桶本さんもそうなんです。親の跡継ぎだけれど、自分は認めてもらえない。それならコンクールにでも出て腕を証明しなくてはならないと。今ならコンクールに出たら、一気に評価が高まりますが、当時のコンクールはそういうものでした。私の場合は西日本で初めて入賞しましたが、この世界で上位に行くのは、東北の人がほとんどです。雪で仕事のできない冬場にコツコツと腕を磨く。そういうイメージでした。そのコンクールでも、1回目、2回目は西日本からは誰も入賞していなくて、3回目に私が京都の代表で出て入賞した。それなら、仕事はできるのだらうと。そういうこともあって、銅板の仕事でも認められるようになりました。

少しずつ銅板の仕事が増えてきて、数寄屋、茶室を専門にしている工務店からの依頼で、旅仕事にもよく行きました。年齢的に言えば20代です。20代なんて、まだまだ一人前には見てもらえない。こちらも「役に立つかどうかわかりませんが、頑張ります」と言ってやっていました。やがて30代の半ばくらいのときに、小野工業所さんの大阪支店長で、営業力が抜群の方がいて、「京都で、銅板のできる人はいないか」ということで、声をかけていただきました。それで大阪の物件を任せてもらい、京

都地区の仕事も継続して請けるようになりました。

小野さんの仕事で銅板をやっている。それなら仕事ができるのだ、ということで、いろいろと板金屋さんから下請けの仕事をもたらうのですが、現場に行くと、元請けの工務店の人と会うわけです。工務店としては、AならAという板金屋さんには仕事を頼んでいるのだけど、うちが下請けで行っている。Bという板金屋さんには頼んでいる仕事でも、うちが下請けで行っている。結局、別の業者だと収められない、鬼が叩けないみたいな部分もありますし、板金屋さんとしては、自分でせずに外注に出して、マージンを稼ぐ方が儲かるという部分もあったわけです。だから、仕事ができる人でも自分はしない。けどどちらか、自分たちでコツコツやっていたものですから、「あそこは銅板の仕事をよくやっている、社寺の仕事が多い」というふうには口コミで広がっていきました。

阪神大震災の後も、社寺関係の仕事で、兵庫や大阪に毎日のように行っていました。そこに尼崎でいただいた感謝状が掛けてありますが、あれも地震後のまったく1から



の建て直しです。兵庫や大阪でも仕事をして、東京からも仕事 came たり、あるときはハワイの仕事もやりました。

遠くからお仕事の依頼が来るということは、それだけ、できる人がいないということですか。

田原 数寄屋建築というのは京都ブランドなんです。東京や大阪にも大きな工務店さんはありますが、数寄屋というと、地方の仕事でも京都に依頼が来るんです。それで板金や左官などの職方も元請けさんについて行きます。左官が行くのは京壁です。京都は土が違うんです。よその土ではダメなんです。寺社建築にしても、小野工業所さんは別格として、やはり京都が中心です。ご住職さんが京都出身だったり、修行に京都に来られたという方も多いですから。

そういう中で、京都で銅板といえば田原板金さんということになっていったのですね。

田原 京都で銅屋根中心というところが他にないということで小野さんとお付き合いをさせていただいた。それならうち自身も、銅屋根をメインに出していこうかということで、トラックにも社名の横に「銅屋根をやっています」みたいなことをうたったりして、銅屋根なら田原板金というイメージを出していきました。

ハワイのお寺の400平米の銅板葺きを20日で完工

先ほどおっしゃったハワイのお仕事というのはどういった内容だったのですか。

田原 ホノルルの北側で、サーフィンのメッカとして有名なノースショア地区のハレイワにある真言宗の弘昭寺さんです。施工面積は400平米くらいありました。

みなさんは飛行機で行けばいいとして、折り曲げ機



ハワイのお仕事は、ご関係者が立派な本にして残されています
なんかはどうされたのですか。

田原 折り曲げ機は、先に船で運んでおいた。材料も、加工はここでしておいて1年前から船便で運びました。

向こうには、どのくらい滞在されたのですか。

田原 20日ほどで、その間休みなしです。朝6時に起きて毎晩遅くまで働きました。夜の8時ごろに仕事をしていたら警察が来たことがありました。ジープのパトカーで乗り付けて来て、すごい体格のポリスが拳銃を持って、動くな、みたいな感じで降りてくる。われわれはエアガンという機械で釘を打つのですが、それがバンバン音がする。昼間はそんなに聞こえないのですが、夜、シーンとなってきたらあたりに響く。それを近所の人が銃声と勘違いして通報したんです。すぐに住職を呼んで、説明してもらったのですが、その翌日もポリスのヘリコプターが上空を旋回している。何だと思ったらわれわれのことを監視している。

それにしても、この大きな屋根をよく20日で葺き上げられましたね。

田原 普通ならもうあと1週間もらわないと絶対にできない。向こうの人はみんなびっくりしてしまいましたが、われわれはみんな泣いていた。朝早くから夜遅くまで働き通して、まったく遊ぶ時間がないと言って。仕事から解放されたのは、最終日の半日だけです。最終の夜と、明くる日の飛行機に乗るまで。

施工は総勢5人です。箕甲をそんなに凝ったものにしなくて、その代わりに降り棟を立派に仕上げました。その降り棟と箱棟は、われわれが行く前にこのサイズに組んでおいてほしいと言って、全部図面を書いて送りましたし、折り曲げなどは、あらかじめ全部ここでやっておきました。

だから、20日でできたのですね。

田原 そうです。向こうで寸法をあたって、1から加工していたら、とても間に合わない。もちろん、事前に1度、採寸には行っていますが、これだけの材料となると、日本での準備にもかなりかかりました。

暑かったのではないですか。

田原 もう暑いを通り越していました。屋根の上にペットボトルを持ち込むのですが、1時間経ったら降りて、水を補給しなくてはならない。そんなに降りていたら仕事にならないけど、そうしないと脱水症状になってしまう。まあ、ハワイと言ってもその間は雨ばかりでしたから、何とか体がもったのだと思います。

困難な仕事に挑戦するのが職人の喜び

銅屋根で実績を積まれて、どんどんお仕事を拡げていかれた。チタンでも、経験されているところが少ない中、小倉百人一首殿堂に始まって、次々といいお仕事をなさっていますね。

田原 関西では、まだまだチタン屋根の経験のある板金業者は少ないですし、うちの場合、社寺をやっているのも強みですね。社寺は手間がかかるので、普通はあまりやりたがらない。数寄屋は基本的に真っ直ぐに葺く。反りはないし、ハマグリも一定のものを使います。しかも長尺でいいというのなら全然手間が違ってきます。だけど、うちが施工してきたものには、伝統の様式そのままにチタンでやっていかねばならないという物件が多い。そのへんの苦労がありますね。

チタンの特性を考えると、伸縮が少ないから、一文字は継ぎ手なしで長尺でも葺ける。いちばん長いところは部材の横寸が6メートルという物件もありますね。

田原 洋風建築や現代風の数寄屋なら、それはそれで、きれいかもしれないですね。だけど社寺は一文字のこの細かさがあって初めて成り立つ。ハマグリにしても小さな部品です。箕甲にしても絶対に段数で反りをもってこなくてはならない。1枚でやると沈んでしまう。どう苦心してもねじれが入ってくるから、どこかにハゼを入れておかないと逃げがなくなる。だから、それなりの葺き足で縦を入れておかないとバランスが悪くなります。

本当に手間のかかるものばかりですが、それはやはり、田原板金さんの腕を信じて依頼が来る。

田原 言ってこられるのが手間のかかるものばかり。やりがいはあるけど、なかなか儲けにはつながらない。うちは10年も同じトラックに乗っていますよ(笑)。採算だけを考えたら、平で速く施工できるものの方がいいのですが、彦根の北川邸にしても普通の住宅で、パツと見たら四角の屋根に見えるけどそうではない。屋根の勾配がバラバラで、葺き足を1つ1つ変えなくてはならない。加工が4面分、すべて一緒ではない。かといって、角でハゼをやってしまうと、屋根のデザインが生きないわけです。それでもやはり苦労した分、設計の木下先生や施主さんにとても喜んでいただけました。

われわれも取材に行きましたが、屋根の勾配が変則的で、本当にたいへんだっただろうと思いました。

田原 大工さんも苦労していました。勾配の違うところ屋根の面の勾配がすべて違うので、四隅の最終の点がきれいに合うかなと、それを非常に気にしていた。だから屋根の下地は、ちょっと控えめにしておいてもらって、あとはわれわれで合わせますと。それでピッタリと合わせることができました。

このほか、チタンの施工事例としては、町家の細かい物件があります。社寺だけでなく、本当の小さな町家で瓦棒を葺くとか、家の裏とか、玄関の庇とか。

それも、やはり耐久性からですか。

田原 瓦棒の場合は、屋根の勾配です。ハゼが立ってい

ないと雨漏りがしますから、勾配が緩いと一文字は貰けない。横のハゼだと雨が入るから、縦のハゼにしないとマズイ。だから必然的に瓦棒という形状になる。

そうするにしても、他の材料でなく、チタンを使われたというのは。

田原 すべて、うちからのお勤めです。たいていはカラーステンレスを使ってほしいと言われるのですが、チタンでもカラーステンレスと同じ値段でしますとって勧めました。玄関の庇にしても、カラーステンレスで一文字をやってくれと言われる。だけど、余分に仕入れておいたブラストが残っている。もしそれで足りなくても、ちょっと足せばいいだろうと。それで、ステンレスの値段でいいですからと言えば、もう絶対にチタンでとお願いしますね。もう大喜びです。

そうでしょう。こんなありがたい話はありません。

田原 もちろんそうですが、少しでもチタンの宣伝になればいいと思うんですね。

そこまでご協力いただきまして誠にありがとうございます。お勤めなさる理由としては、長持ちしますよと。田原 そうです。まずは耐久性です。また、一時期は、銅が非常に高くなった。それだったらステンレスもいいけど、チタンの方がいいでしょうと言ったら、予算のあるところはチタンにされた。チタンの値段がこなれてきたら、うちからも、もっと勧めやすくなるのですが。

われわれも、建材用チタンの需要が増えて、価格的にももっとスケールメリットが出せるようになればと努力していますが、チタンは今後も伸びるのでしょうか。

田原 今はお客さんが、「銅は酸性雨でダメだ」と言われますから、今後はチタンの需要は増えるでしょうね。全部銅で丸葺きした場合には酸性雨にも強いのですが、腰葺きのように、銅板の上に瓦屋根があったりすると、穴が開きやすくなる。丸葺きだったら大丈夫なのに、銅は穴が開くと言って工務店さんが勧められない。

実際の経験から、丸葺きなら大丈夫だけど、瓦葺きに銅を使うと、やはりそういうことが起きると。

田原 それでも20年や30年ははもちますよ。小野さんの仕事で南座をさせてもらって、それももう20年近くなります。だけど穴はまったく開いていない。南座には銅板の唐破風があって、われわれは唐破風だけでも200近く施工しています。東京や仙台でも唐破風をやっていますし、淡路島で大震災の後に施工した物件だけでも、唐破風がたくさんあります。

唐破風なら、もう田原さんと。

田原 結局みんな唐破風の仕事を嫌がるんです。だから京都だけでも結構ある。知恩院さんもそうだし、大徳寺さんもそうだし、みんな唐破風だけうちが行ってやっている。

みんなが嫌がるのに、田原さんは嫌がらない。

田原 それが仕事の面白さです。みんな

なができないと言うのなら、うちがやってやろうかと。プロ野球の選手と同じで、チャンスで打たないといけない。阪神の金本みたいなものです。金本が逃げたら勝負にならない。阪神は全滅。自分たちができないと言ったなら、京都の板金も全滅というくらいの意気込みでやっていきたいと思っています。

私が若いときに、小野工業所さんのような会社が、銅板のいい仕事をたくさんされていた。どうしてだろうかと考えたときに、やはり素晴らしい実績があるからだと思ったのです。小野さんの仕事をいただきながら、そういう部分も勉強させてもらって、京都の業者としてうちも実績を積みねばならないと努力しました。おかげさまで、今では各地から仕事をいただくようになりました。

それにしても、施主さんは大喜び、みたいなお仕事ばかりです。効率優先、利益優先の世の中で、よほど仕事に惚れ込んでいないとできないことだと思います。

田原 面白い仕事があれば、別に儲けは関係ない。効率が悪くても、この仕事をやり遂げたのだという意気込みが伝われば。この業界というのは、図面もなしに、最初は平米いくら、と聞かれるケースが多いんです。それで、これくらいかかります、と言うのですが、図面を見たら、「うわあ、しまった」と。だけど言った以上、うちの場合はそれでやります。

田原板金さんのように、すぐれた技術をおもちの方々が、大きな物件で素晴らしい仕事をされて、また、その一方で、一般住宅にも地道にチタンを広めてくださる。本当に頭の下がる思いがします。

田原 やはりお施主さんの気持ちに応えたい。だから最初から大儲けしようという気持ちはない。あとは、仕事の達成感です。それと、新日鐵のチタン建材の関係者が、新しい材料の開発や品質の安定化、在庫対応とかも含めて、以前から継続して頑張られているし、このホームページのインタビューでも、いい仕事をしている同業者の方が登場されている。そういう全員がいいようになっていけばいいと思うから、うちも頑張ろうと思うわけです。

いいお話をありがとうございました。また、日ごろからチタンのPRにご協力いただきまして、改めてお礼申し上げます。今後とも、よろしく願いいたします。



京の夏の風物詩・祇園祭でもご活躍。写真の菊水鉾の前に立つお2人のうち右が田原社長



全国建築板金業者埼玉大会の弊社ブースに登場した阪神タイガースのレリーフは、大のトラキチ田原社長の作品